

堺の刃物鍛冶と鉄炮鍛冶

藪 田 貫

要 旨：センターの基幹研究班が進める「鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家に関する堺市との共同調査に基づく鉄砲ならびにモノ作りに関する研究」は、毎年秋にシンポジウムを開催しているが、2022年度は「よみがえる鉄炮鍛冶屋敷——鍛冶技術の変遷を辿る——」をテーマに関西大学で開催された。本稿はその基調報告として、丸山徹・林武文両教授の報告と一体となるものである。

キーワード：環濠都市堺、鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家、鉄砲の製造と修理、刃物鍛冶

はじめに

慶長20年（1615）に起きた「大坂夏の陣」で壊滅した堺は、80年余り後の元禄2年（1689）、復興した姿として「堺大絵図」（以下「大絵図」と略称）に描かれた。堺奉行所が作成した官製地図で、広げてみると30畳敷きの部屋が一杯になるという大きさに加え、南北両組合わせて約180ある個別町の水帳（土地台帳）と一体となるというもので、すべての屋敷について、家主の名と間口・奥行が分かるという。これほど詳細な都市図を残しているのは、堺だけである。

眺めていると、紀州街道を軸に町が発展した北部と、宿院や大寺（念仏寺）を中心に発展した南部が、大小路を境に繋がっているのが分かる。中世界の町の形成が、南北で異なっていたことの現れで、元禄6年以降に北組・南組に分かれる以前の南北四辻制（本郷と端郷の合計4つの行政区画）を窺うことができるとされている^[注1]。

識語から大絵図は南北四辻の惣年寄の下で別々に作成されたと思われるが、その後、九分割されて現存する。管理の便を考えてのことと思われるが、その一枚、北組の北端を描いた部分に、中浜一丁目に所在する鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家がある（図1）。「大絵図」には間口6間（約12メー



図1 堺鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家古写真（昭和30年代後半）

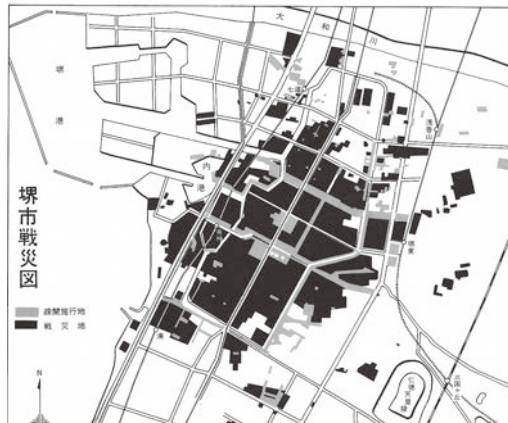


図2 空襲による被害（「堺市戦災図」）

トル）として描かれているが、現在の敷地は間口17間半（約35メートル）——ただし裏行は15間（約30メートル）と9間半（約19メートル）と変わらず——ということで、三倍弱に拡大している。それはとりもなおさず鉄炮鍛冶としての同家の成長を物語るが、堺鉄炮鍛冶の歴史を語る上での大きなポイントである。

調査によって主屋の建物は、江戸前期に建てられたものと判断されている。それが現在に残っているのは、1945年の5次にわたる米軍の空襲を思う時、奇跡というほかない。歴史都市堺の中心部であった大小路をはじめとする町々が呈する惨状の一方、わずかに中浜一丁目を初めとする北部地区の一画が焼失を免れたのである（図2）。したがって堺市による鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家の保存と整備は、堺市環濠北部地区の街なみ環境整備と並行して進められている。

江戸時代の鉄炮鍛冶屋敷として日本に唯一、残っている井上関右衛門家（代々当主が関右衛門を名乗った）に初めて調査が及んだのは平成26年（2014）のことである。堺市と関西大学との共同事業として始められ、その年の7月、大量の資料がなにわ大阪研究センターに運び込まれた。調査は平成31年度までのべ4年間、続けられたが、その間、井上家当主井上修一氏から堺市に住宅の寄贈の申し出があった。「蔵のとびらを開いてみれば」と題する市民対象の調査報告会に参加した修一氏と弟俊二氏のご兄弟が、報告を通じて、同家の鉄炮鍛冶としての価値の高さに気付かれたことからの提案であった^[注2]。

これを受けて堺市では、鉄炮鍛冶屋敷を博物館として再生させる事業を立ち上げることを決め、それは現在に続いているが、年に一度の報告会は令和2年度以降、「よみがえる鉄炮鍛冶屋敷」と名を改めて続けられている。しかし報告会の基調は不変である。井上関右衛門家の2万点を超える資料を正確に調査し、そこで明らかになった事実を、堺市民はもちろん、大阪や全国、さらに世界に発信することが、その目標である。

1. 井上関右衛門家資料の価値

しかし2万点余に及ぶ資料を調査する道のりは遠く、予定通り令和5年度に堺鉄炮鍛冶屋敷ミュージアムがオープンして以降も調査が続くことは間違いない。わたしはこの8年余、調査に携わってきたが、個人的な感想として井上関右衛門家資料には、つぎの3つの重要な価値があると理解している。

第1に、日本の鉄炮の歴史を書き換える可能性がある資料であること。

第2に、鉄炮のみならず、現在の包丁や自転車など堺の地場産業についても新しい知見を加えるだろうこと。

第3に、江戸時代を中心に、歴史都市堺の人々の暮らしや文化についても興味深い情報を提供するだろうこと。

1と2は今年度のシンポジウムのテーマでもあるので、のちに述べるとして、3について簡単に紹介したいと思う。

これは10月の調査の折に帳簿に挟まれて出てきたものであるが、貸本屋の領収書と請求書である(図3)。堺市中に貸本屋があり、井上家が定期的に本を借りていたことを示すものであるが、江戸期の堺町民の文化生活を知る貴重な史料である。領収書からは、二カ月に一度、貸本を持って廻っていることが分かる。

江戸時代の文化史研究の進展によって、大阪柏原の商家三田家^{さんだ}には蔵書目録があること、また摂津伊丹の酒造家八尾八左衛門家^{やお}では「日記」に、大坂から回ってくる貸本屋について記していることなどが明らかにされている^[注3]が、堺ではどうだったのか。南北朝時代の正平版『論語』の出版で有名な歴史都市堺のことなので、江戸時代にも豊かな都市文化が花開いていたのは推測できるが、空襲による被災もあって、文化生活については特に不明な点が多い。そこに突如、貸本屋が顔を出したのである。鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家は鉄炮鍛冶と同時に、上層の堺町民でもあったからである。

いまひとつ私札^{しきつ}がある。鍛冶業のためには鉄と炭が不可欠だが、その取引の文書には松・米・松炭ともに札2貫570匁、札403匁と金額が札^{ふだ}(紙幣の一種)で書かれている(図4)。堺は大坂と並んで幕府の直轄支配で、基本的には正貨(金銀銭)の使用が優先され、私札は大名や旗本領で使用されている。堺では旗本の今井役所が発行した今井札が有名であるが、ここに出る札は商人間で使用されるもので、旗本が発行するモノとは異なる。商売には為替など紙の手形が多種多様に発行されていたので、特段珍しくはないが、鍛冶屋との取引に必須のものとして、誰が発行し、どう使ったものか気になる。

堺の町に住み、長年、鉄炮鍛冶として営業してきた以上、井上家の暮らしには堺の商慣習が前提になっているのは言うまでもない。国際交易都市として発展した堺の経済は、糸割賦商人などの商人が担い、大小路・宿院を中心とする地域に居住していたが、そこが空襲に見舞われているため、商業に関する資料は多くない。その欠如を、周縁部に位置し、職人でもあった井上関右衛門家の資料が補ってくれる可能性がある。

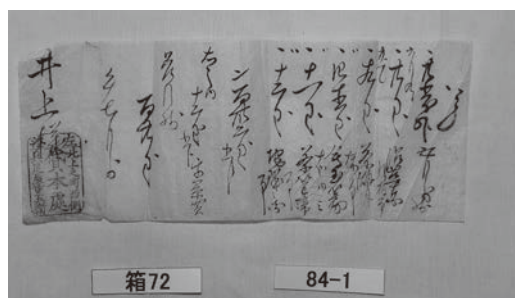


図3 貸本屋の領収書

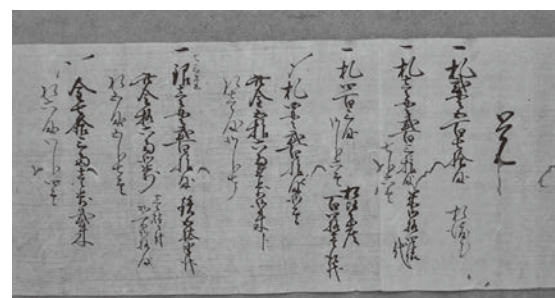


図4 炭の取引書類

2. 鉄炮生産の趨勢

さて、第1として挙げた「日本の鉄炮の歴史を書き換える可能性」については、すでにマスコミの大きく注目するところである。なによりも注目すべきは、鉄炮注文の数値が正確に分かることである。

堺の製造する鉄炮については、つとに元禄7年(1694)『手鑑』に載せられた「諸国ヨリ詔鉄炮員数」が知られており、戦前に発行された『堺市史』第3巻本編第3ならびに第5巻資料編第2に紹介されている^[注4]。それは承応元年(1652)から元禄7年(1694)までの数値で、棒グラフにすると図5(グラフA)の通りであり。一部、幕府の注文が含まれているので、それを除く数値を併記しているが、約40年間の推移が分かる。実際には注文の数なので、生産実数というわけではないが、右肩下がりで明らかに衰退している。この時期は第4代將軍家綱の時代で、かつて3代將軍家光の〈武断政治〉から4代家綱・5代綱吉の〈文治政治〉へ轉換した、と教科書で教わったことと対応している。

元禄年間には500丁を切っているが、当時70軒(「堺手鑑」)から100軒(「細工人連判証文」)の鉄炮鍛冶がいたことからすれば、一軒当たりの注文がどれほどか、嘆かわしいほどの不況下にある。かつてアメリカの研究者が、「鉄炮を捨てた日本人」とタイトルを付けた本を出版したが、その表現に相応しい数値である^[注5]。初代関右衛門は、この状態の下で鉄炮鍛冶として存在していた。

この『手鑑』のデータがどうして集計されたのかは不明だが、鉄炮鍛冶が注文を奉行所に届けることについては、元禄9年の「細工人連判証文」に謳われている(『報告書』に掲載)。玉目(弾丸)10匁(キンカン大、重さ38グラム)以上の鉄炮の注文を受ければ即座に、10匁以下なら一カ月に一度、堺奉行所に届けると決められ、末尾には、鉄炮年寄が注文品・店先売り分・直し筒(修理)ともに年の暮れに大坂町奉行所に帳面にして提出するようにと指示があり、鉄炮鍛冶への注文がいかに厳重に管理されていたことが分かる。したがって当然、鉄炮鍛冶を取り仕切る鉄炮年寄であった芝辻理右衛門家にもあったと思われるが、現存する芝辻家文書には見当たらない^[注6]。由緒を語る

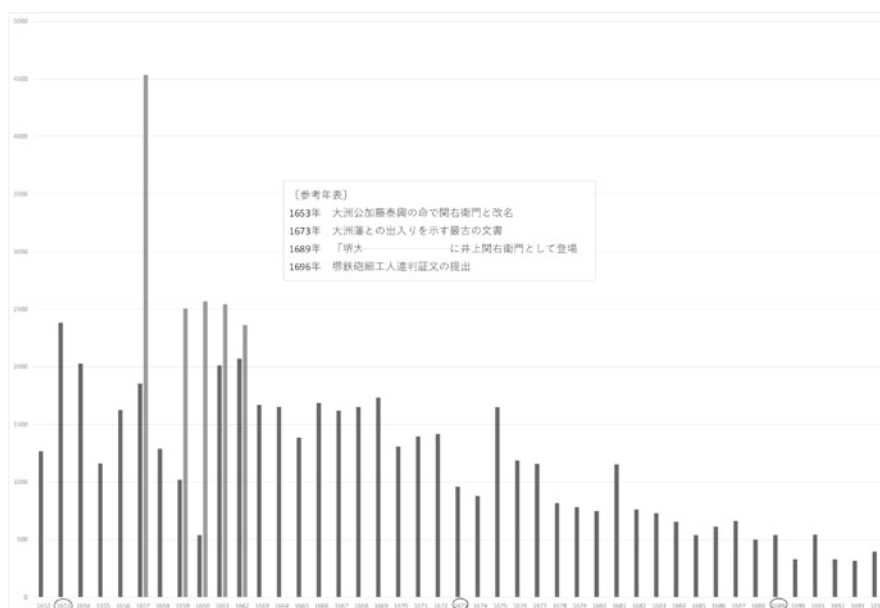


図5 (グラフA) 諸国より鉄炮詔え数の変遷(1652~1694)

資料や、武家の書簡などと比べると、営業や管理の帳簿は一年一冊作成され、貯まると膨大な量になることから、そのままを残すことは容易ではない。しかしある時期以降、当主たちが残すと決めて実行したことから井上関右衛門家には残った。その意義の大きさは、どれだけ強調してもし過ぎることにはならない。

もちろんこの棒グラフからは鉄炮の玉目（弾丸の重さで口径が変わる）はもちろん、新規注文と修理の内訳が分からないという欠陥があるが、一時期の堺の鉄炮鍛冶産業の趨勢を示しているのは間違いない。もう一つの鉄炮産業の地近江国友（現長浜市）でも同様の傾向が指摘されており、日本の鉄炮史共通の史実として知られている^{〔注7〕}。

このグラフが示すのは元禄7年（1694）までだが、井上家資料の出現で、宝暦2年（1752）以降明治初年（1871）までの鉄炮注文の状況が判明した（図6 グラフB）。先ほどとは反対に右肩上がりに注文数が増え、当初30丁前後であった新規注文が、天保末年には200丁を超えるまでに増えている。この増産は、武家相手のサムライ筒（上向き棒グラフ）だけでなく、百姓猟師筒（下向き）にも見て取れるが、その様相を捉えて関右衛門壽次は後年、「文政・天保年間は、実に鉄炮師の全盛を高めた時代」だと述べている。

この趨勢は井上関右衛門家に限る数値であるが、天保13年（1842）当時、堺の鉄炮鍛冶は19家あり、全国の大名家（一部、旗本を含む）のうち239家と出入関係、つまり得意先を持っていた。その内訳は井上関右衛門家が61家でトップ、ついで芝辻長左衛門が51家、藍谷与左右衛門が45家、榎並勘左衛門が42家、松本卯一郎の32家と続いている。芝辻・榎並・松本は桜町、井上・藍谷は中浜1丁目に居住し、鉄炮鍛冶は地域として二分されている感があるが、この5家で出入の大名家は96%となる^{〔注8〕}。しかし単独契約を30%程度に収め、複数契約（相出入）を認めることで、19軒の鉄炮鍛冶全体の繁栄を計る措置を取っていたことが重要である。「鉄炮師の全盛」と関右衛門が記したのは、それを踏まえてのことである。

一方、堺全体の鉄炮の受注数でいえば文久年間（1861～63）に明らかとなる。第一位は榎並勘左衛門で270丁、以下、2位の井上関右衛門ら5位までが200丁を超えている^{〔注9〕}。その結果、総数が1500丁を超えるのであるから、堺の鉄炮産業は文政期以降、再び、再拡大したといえるであろう。

その背景には幕府の寛政改革による文武奨励と、ロシアの南下にともなう海防問題の発生があり、砲術史研究で著名な宇田川武久氏は、この時期には砲術師が全国で活躍し、射撃術が個人の趣味から戦術的なものに変化していったと指摘している^{〔注10〕}。それをうけてわたしは近年、再び日本は軍

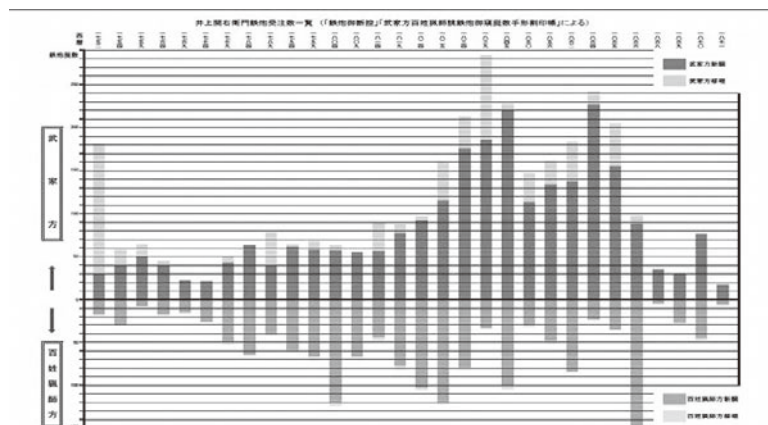


図6（グラフB） 井上関右衛門家鉄炮受注数一覧（1752～1871）

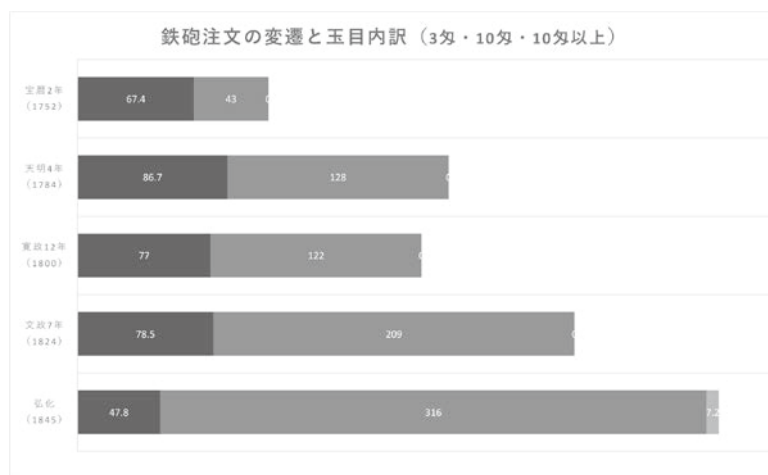


図7 鉄炮注文の変遷と玉目内訳 (1752~1845)

備拡張の時代に入ったと理解している^[注11]。

こういう判断をする上でも重要なのは、井上関右衛門資料に残る鉄炮の注文台帳、「鉄炮御断控^{てっぽうおことわりひかえ}」と題し、奉行所に提出した帳面の存在である。これには武家と百姓獵師の注文の別はもちろん、修理と新調の区別も分かり、さらに鉄炮の玉目も分かる。図7は、3匁（口径12.6ミリ）と10匁（口径18.7ミリ）を基準に、それ以下と以上に分けて示したもので、文政年間（1818~30）までは3匁から10匁が70~80%占める形で増え、弘化年間（1844~48）に入ると10匁以上が増え、なかには100匁の大筒も含まれるに至っている。いわば量から質への転換で、井上関右衛門も大筒作りに挑戦する時代になったのである。

こうして堺の鉄炮産業は近世後期、復興と再拡大の道を歩み、幕末にピークを迎えるが、慶応元年（1865）以降、急激に低落して、明治に入ると、よく知られているようにゲバールやスナイドルといった洋式銃にとって代えられ、和式銃は役割を終えていく。関右衛門壽次は、和式銃の最期を見届けた堺最後の鉄炮鍛冶でもあった。

3. 「空白の50年」

しかしながら井上関右衛門家資料が出たことで、堺の鉄炮鍛冶の歴史がすべて分かった訳ではない。依然として謎が残っている。図5（グラフA）と図6（グラフB）の二つのグラフを比べてほしいが、1694年から1752年の間、約50年間が空白である。それは堺全体の鉄炮注文の数量的な把握ができないことを意味するが、それだけでなく鉄炮鍛冶井上関右衛門自身に関わる資料も少ないのである。

調査メンバーであった中田佳子さんは、系図や人別改帳などをもとに井上家当主のライフスパンを明らかにしている（図8）。それによれば図5は2代関右衛門の時代、図6は3代関右衛門正次以降の時代に当たるが、2代に関しては、寛文13年（1673）の年紀を持つ大洲藩からの鉄炮修理注文のみで、実名は不明。そして3代関右衛門である正次が「確かな実名が現れた最初の人物」として登場し、その後半になって「鉄炮御断控^{てっぽうおことわりひかえ}」が出現する。それでも彼に関する私的な史料は一切なく、4代為次の代になって家督相続（1769年）と還暦を祝う文書（1785年）が出てくる^[注12]。そして5代吉次が1801年、鉄炮鍛冶仲間の代表である鉄炮年寄に襲名し、5代から6代直次にかけて経営が

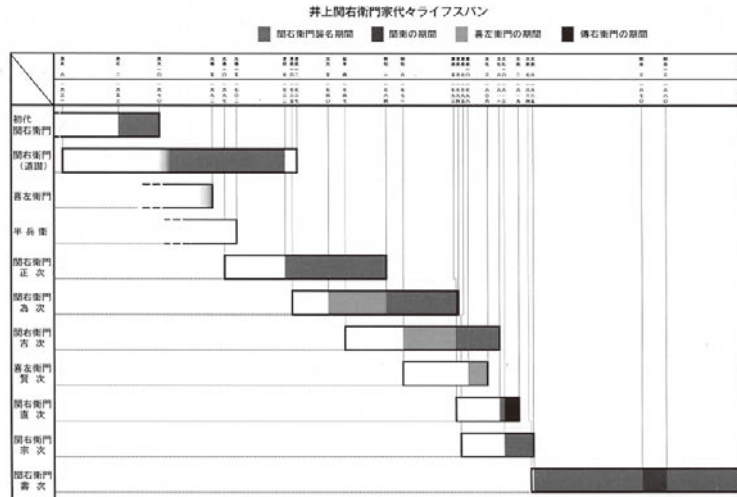


図8 井上関右衛門家代々のライフスパン



図9 井上関右衛門家住宅内の炉跡



図10 堺刃物庖丁店（『大日本物産図会』）

右肩上がりになっていく様子が窺える。この二代の間に、屋敷地の間口が6間から17間半に増えているのである。

したがってそれ以前、言い換えると表間口6間時代の井上家はどうであったのかという問題が重要となる。いわば井上関右衛門家の初期の姿、原井上関右衛門家を推測する必要があるが、それを解く手がかりは二万点の井上家資料にはない。

ところが、手がかりと思われる痕跡が地下で見つかった。今年度の家屋の解体・整備事業の最中に、主屋の中心部（6間間口の範囲内）の地下から複数の鍛冶炉跡が出てきたのである（図9）。

現在、井上関右衛門家の鍛冶場の炉跡（火床と呼ばれる）として認定されているのは裏口の駐車場部分である。だがそれよりも遙か以前には表間口の傍に炉、したがって店の間のすぐ傍に鍛冶場があったことになる。興味深いことに『大日本物産図会』には、店先の右手に鍛冶場と研ぎ場がある打ち刃物店が描かれている（図10）が、それを彷彿とさせる構図である。それが初代関右衛門の時

代か、それ以前、井上家が中浜一丁目に定着する以前のことなのか、正確な判断は考古学者の判定に譲るほかないが、いま私たちが復元整備しようとしている鉄炮鍛冶屋敷とは明らかに異なる間取りである^{〔注13〕}。関ヶ原合戦以前から加藤公に仕えていた井上家が、慶長15年（1610）、主君の鳥取米子への移転に際し、兄は米子（のち主君の大洲移転に随行）、砲術家であった弟が堺に出て、鉄炮鍛冶を始めたという家伝に従うなら、どうして彼が、堺市中のほかでもない中浜一丁目に居を構えたかが問題となる。

もうひとつ注目したいのは、鉄炮修理の問題である。図6（グラフB）の左端、宝暦2年（1752）の棒グラフでは修理が153丁と新調29丁よりはるかに多く、他の年の傾向と大きく異なっている。その理由は何か――。

井上家には、「鉄炮御断控」とは別に鉄炮修復関係文書が相当数、残っている。内容は二種類あり、一つは大坂城内の複数の櫓に収められていた鉄炮の定期的な修繕に関するモノで、大坂城に勤務する城番大名家と鉄炮年寄を介した関係として5代吉次以降、集中的に現われている^{〔注14〕}。ところがいま一つ、3代正次の代、18世紀の半ばにも修復文書が数点ある。「御鉄炮百挺御修覆目録」「御鉄炮百挺御修覆仕様帳」「御鉄炮御修覆値段書」などと題する帳面で、鉄炮を100丁ないし150丁、鉄炮鍛冶が数名、集団で受注し、修理することを示したものである。たとえば寛延4年（宝暦元年、1751）の「御鉄炮御修覆値段目録控」は、150丁の鉄炮を、関右衛門を筆頭に田中・山田・藍屋・榎並など9名で分担して修理し、代金6貫488匁（金にして108両）で引き受けるというものである。その150丁は、翌宝暦2年に計上され、グラフBに示されている数値と同じである。その年を最後に、こうした集団請の記載が無くなることから、宝暦2年の数値が異常にみえるのである。そこには仕組みの転換が予想されるが、それはどういうものか謎である。

幸い、この動向を理解する有効な史料が残されている。「堺市史資料」の一つ「鉄炮鍛冶仲間諸事留帳」（堺市立図書館蔵）がそれで、「覚」と題する文書には宝永5年（1708）から寛保2年（1742）の間16年分のデータが載せられている。宝永5年の冒頭を掲示すると、つぎの通りである。

宝永五子ノ年

一 八十五挺 内四十挺 三匁五分玉 新筒 丹波屋与十郎

四十五挺 同玉直し筒 松本宇兵衛

右ハ松平丹後守家来宮田宮内訃

明らかに鉄炮鍛冶が受けた注文を届けたもので、元禄9年の「細工人連判証文」に言う条項が仲間として履行されていたことを教える。これを含めて、判別する数値と注文主を一覧表にしてみる（図11）。

詳細な分析は今後の課題としたいが、新調が見えるのはわずかに4ヶ年、数値も40～50丁にすぎない。それに対して修理は、50丁から100丁の間で推移している。これからも18世紀の前半、堺の鉄炮鍛冶は、既存の鉄炮の修理を諸大名家から受けることで生計を維持していたと考えられる。大和高取藩植村家は4ヶ年でじつに349丁の鉄炮、しかも玉目の小さな規格品の鉄炮を大量に修理に出している。したがって各大名家はこの時期、相当数の鉄炮をオーバーホールしているとも見られる^{〔注15〕}。「大坂の陣」から100年余、大名家の城の鉄炮櫓などに収められていた銃砲も相当、傷んでいると思われるが、それが一斉に修理に出されているのである。

井上家に残る4カ年の修理関係文書を一覧表に挿入してみる（ゴシックの部分）と、違和感がない。多くが大名家の注文であるのに対し、番所・奉行の記述からこれらの修理品は、堺や大坂などの奉行所付属の鉄炮ではないかと推測される。単独の大名請と異なって複数の業者請であるのも、

年次	西暦	挺数	玉目	新筒	直し筒	注文主	鉄炮鍛冶人数
宝永5	1708	85	3匁5分	40	45	松平丹後守家来宮田宮内	2
5	1708	50	3匁5分	30	20	松平左兵衛督(明石藩)	5
6	1709	44	4匁	44		紀伊中納言家来吉川源五兵衛	1
7	1710	90	4匁		90	植村右衛門佐(高取藩)	1
7	1710	50	6匁		50	榊原式部大輔(越後高田藩)	1
享保3	1718	50	4匁3分	50		松平民部大輔	1
6	1721	40	3匁5分		40	松平左近将監	1
7	1722	44	3匁5分		44	岡部内膳正(岸和田藩)	1
8	1723	124	4匁		124	植村右衛門佐	1
10	1725	116	6匁		116	有馬玄蕃	1
12	1727	100			100		5
14	1729	95	3匁5分		95	毛利周防守(徳山藩カ)	1
15	1730	85	4匁		85	植村右衛門佐	1
元文2	1737	40	3匁1分	40		松平大膳太夫(萩藩)	1
3	1738	90	3匁5分		90	松平周防守	1
4	1739	62	4匁		62	稲葉内匠頭(白杵藩)	1
6	1741	50	10匁・3匁5分		50	伊東熊太郎(日向鉄肥藩)	2
寛保2	1742	50	4匁		50	植村三蔵	2
2	1742	25				東番所	1
3	1743	252		2	250	松平大和守(姫路藩)	2
延享3	1746	100			100		
寛延4	1751	150			150	御奉行所	7

図11 鉄炮修理注文一覧

受注の性格の違いを示している。いずれにしても高度な技術品は、整備されてはじめて活用されるのである。銃砲史における修理という問題である。

くわえてこの調査のきっかけが注意される。「諸事留帳」によれば寛保3年(1743)5月、芝辻長左衛門と井上関右衛門が、松平大和守(寛保元年陸奥白川から姫路藩主に転じた松平明矩)から大口の鉄炮修理の注文を受けたとする報告を、大坂城代酒井忠恭が「新筒800丁の注文を受けた」と誤って聞いたことが発端であった。その後、両者は呼び出され、吟味の上、芝辻が100丁、井上が150丁の修理注文であることが確認されたが、以後、50丁以上の注文は口上書に記して差し出すように求められ、芝辻と井上は翌9日、堺奉行所に提出している。

表にはその数値も記してあるが、宝永5年に始まる「覚」は、5月10日付で鉄炮年寄榎並屋勘左衛門と芝辻長左衛門が提出したものである。その意味で、修理鉄炮数の増加が、大坂城代酒井忠恭をして堺鉄炮鍛冶への調査を生んだといえることができる。幕府にとって諸大名の鉄炮に関する動向は、常に留意すべき問題であった。

宝暦2年(1752)の「鉄炮御断控」は、そうした動向を受けて始まった制度ではないと思われるが、空白の50年の間にはその他、鉄炮をめぐる新しい動きがいくつか見られる。

まず延享3年(1746)11月、鉄炮鍛冶仲間の出願が認められ、百姓獵師筒の製造が許された(『堺市史』492頁)。「鉄炮御断控」には、出入り大名・家臣と並んで百姓・獵師の名が記されている。衰退している堺鉄炮鍛冶への支援策と言えるであろう。

また同年、宿屋町高三善右衛門が請け負っていた火薬製造を、大和宇智郡新町村から和泉国大鳥郡の夕雲開きの新田畑で精製することを奉行所は認めている(『堺市史』第3巻)。さらに寛保4年(1743)には、試射場の整備がなされている。

これまで鉄炮の試射場は七堂浜から住吉鳥居筋前まで28町(約3km)見通しであったが、大和川の付替え後に新田ができたので、北向きに打つ「星入り」(命中検査)の際には的の先に土手を作って流れ玉の危険を減らす対策を取っている。また力様(遠距離射撃)は西向きに海に向けて撃つ

いたが、その場所を鉄炮鍛冶仲間の預け地にするようお願い出ている。これらは「鉄炮鍛冶仲間諸事留帳」によって知れる動向で『堺市史』にも言及されているが、大量の鉄炮修理の実態と関連付けてみる時、特別な時期として位置づけることができるであろう。その意味で空白の50年を、「鉄炮修理中心の時代」と定義してみたいと思う。

4. 環濠都市と鍛冶業

ところで堺をはじめ中近世の都市というのは、大きな格差を持つ社会であった。現在ならその格差は地価で示されるが、当時は、地子銀で示されていた^{〔注16〕}。

サンドイッチを思い浮かべて堺の北郷を見ると、真ん中に紀州街道の通る本町が南北に貫き、その左右に端郷として中浜筋と山口筋があり、その先にトッピングのような付町があり、海沿いには浜通りがある（図12）。地子銀のランクは本町がトップで、付町・中浜・山口と続くが、意外なことに海浜部の浜通りが結構高い。そこに倉庫が並んでいたことが要因と思われる。

この図に、元禄9年の鉄炮鍛冶関係者の分布を合わせてみると、本町の芝辻などの年寄を除けば、鉄炮鍛冶は付町と中浜筋に集中している。いわば鉄炮年寄の居住区より一ランク低い周辺地域に鉄炮鍛冶は集中しているのである。そこはまた、後述のように刃物鍛冶の集住する地域でもあった。環濠都市堺における〈中心〉と〈周縁〉の問題として鍛冶業の分布はあった。

16世紀末の堺が鉄炮鍛冶の町であったことは、茶人今井宗久（1520～93）の遺した史料からすでに説かれており、^{さくらのちょう}桜町が一つの中心とされている（『堺市史』第3巻本編第3）が、全体の位置関係が明瞭になるのは「大坂の陣」後のことである。合戦に際し功績のあった芝辻・榎並などの年寄衆は、幕府から桜町大道の両側に広大な屋敷地を貰い、定着するからである^{〔注17〕}。その様相は元禄の「大絵図」にも明瞭だが、彼ら以外はそれぞれの判断で居住地を構え、井上家も何らかの理由で中浜一丁目に居を構えたと思われるが、どうしてそこなのか？そこで考えられるのは、炉を持ち、火を扱う鍛冶業としての共通性である。

鉄炮鍛冶としても庖丁鍛冶としても、原料の鉄と燃料の炭は欠かせない。高度の熱をもって、硬



図12 堺元禄大絵図（部分）

さの異なる鉄材を鍛接する作業が必要だからである。刀鍛冶の場合、玉鋼と小割鉄という、炭素濃度、したがって硬さも融点も異なる鉄材を組み合わせるが、鉄炮鍛冶は、炭素濃度が高く、融点の低い軟鉄を使い、素材としては全く別物である〔注18〕。当時は、形状を取って包丁鉄と呼ばれていたが、鉄山師（たたら師）から発送される鉄も「包丁鉄」と呼ばれていた。

残念なことに井上家資料中に鉄の通帳が見当たらないが、部分的な史料によれば、板鉄は三枚を一束の単位として年間を通じて納品されている。重いものであったのは間違いなく、たたら産地島根・鳥取などから海路、大坂の鉄問屋に運ばれ、堺に仕入れされたと思われるが、堺の鉄商人が不明である。

一方、炭については通帳が残されており、九軒町浜和泉屋吉兵衛と井上家の取引が分かる。天保14年（1843）の通帳によれば、正月から2月が360俵、3～4月104俵、5～6月72俵、7～8月48俵、9～10月168俵、11月～12月68俵、合計すると820俵となる。鉄炮の新規注文も増えていた時期なので炭の消費量は相当な量に上るが、粗炭・小遣炭・堅炭（材質は松）の三種類で価格が異なっていた。井上家の「家相図」には、銃床に使う台木の蔵があったとされているが、さらに鉄材と炭を納める蔵があったのは間違いない。

関右衛門壽次の「大阪府勧業調査委員への報告」（『報告書』所載）では、鉄は芸州（広島）と伯州（広島と鳥取）、炭は芸州、台木の樫材は土佐（高知）・伊予（愛媛）・日向（宮崎）・紀州（和歌山）産が、それぞれ最上と記しているが、瀬戸内海と大阪湾を海路、堺に船で運ばれたと思われる。したがって炭の商人和泉屋吉兵衛が、浜通りの九軒町浜にいたことは納得できる。『堺市史』第3巻によれば文化10年（1813）、鍛冶炭問屋7軒が株仲間化されているが、鉄炮鍛冶と庖丁鍛冶が主な取引先だったと思われる。

堺の煙草庖丁は享保15年（1730）に株仲間化され、宝暦11年（1761）以降、北郷の綾町・桜町・錦町・柳町・台屋町・中浜町・善教寺・神明町の中浜筋8町（7町説も）に集住して同職町を形成していた（『堺市史』第3巻）が、それは鉄炮鍛冶と重なる（図13）。つまり炭屋からみれば、鉄炮鍛冶と煙草庖丁鍛冶の存在を前提に営業圏が設定できる。

そのうち柳之町中浜筋には石割作左衛門（「寛政十一年両郷石銀家数寄帳」によると町年寄）がおり、「世に石割庖丁として諸国に名高い」と『和泉名所図会』に紹介されている。石割家由緒書によると始まりは17世紀の前半で、「大絵図」には表間口6軒として描かれているが、明らかに鉄炮に遅れている。煙草庖丁は享保15年（1730）に株仲間となり、堺極の極印を打つことを許されている（『堺市史』第3巻）。



図13 泉州堺打刃物業界大繁盛之図（部分）

他方、『日本山海名物図会』には、南組の宿院寺町近くの「山の上かじや町」に文殊四郎が元祖と伝える料理用打刃物を鍛える鍛冶集団がいたと紹介している。文殊家も山上之町の町年寄を兼ね、隣の鍛冶町の年寄は鍛冶屋甚左衛門とある（『堺市史』第3巻）。したがって南郷にも鍛冶集団がいたことになるが、それが北郷の鉄炮鍛冶・庖丁鍛冶とどういう関係にあったか不明である。

文殊四郎は刀匠から庖丁鍛冶に転じたといわれ、堺刃物の製法には「鉄炮鍛冶によって鍛え上げられてきた鞆ふいごの独特の使い方がある」と記す本（『堺利器同業組合創立30周年記念誌』1938年）もある。また『堺刃物組合連合会史《堺刃物》』（1980年）は、その歴史を石包丁・刀剣・鉄炮・たばこ庖丁・堺刃物に分け、年代順に記している。いずれにしても鉄炮鍛冶井上関右衛門家を、煙草庖丁や料理庖丁など広義の鍛冶業と関連付けて説く必要があると思われる^{〔注19〕}。それは、一村すべて鉄炮鍛冶関連業であった近江国友と異なる堺の大きな特徴である。

共通部分でわたしが注目するのは、鞆への崇敬の念である（図14）。『堺刃物組合連合会史《堺刃物》』にも「毎年十一月八日高須神社において鞆まつりが行われている」とある。それが井上家にとってもハレの日であったことを示す史料が多数、残っている（図15）。さらに温度計もない江戸時代に、2000度近い火の加減を判断する必要から作業は夜を徹して行われていたことを示す史料も残されている。聞けば現代の刀匠には、そうした環境で鍛刀する人がいるという。「火の技」としての鍛冶業の真髄でもある。

刀と鉄炮のもっとも大きな違いは、刀鍛冶も庖丁鍛冶も、伝統的な技法を活かしながら続けられているが、火縄銃などの古式和銃は現在一切、作られていないことである。それ故、現代の冶金学からの考察、CGによる「失われた」技術の復元が必要となる。



図14 現役の炉とフィゴ（水野鍛錬所）

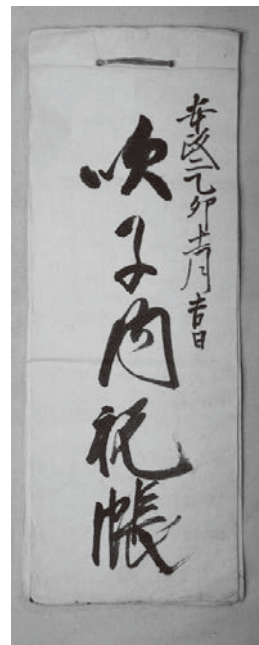


図15 吹子内祝帳（表紙）

〔注〕

- 1 大絵図については、朝尾直弘『都市と近世社会を考える』朝日新聞社、一九九五に詳しい。
- 2 これまでの調査・研究の成果として堺市・関西大学ならびに大阪研究センター編『堺鉄炮鍛冶屋敷井上関右衛門家資料調査報告書』（2019年、2020年増補版、以下『報告書』）を挙げておく。本稿もそれに多く負っている。
- 3 今田洋三『江戸の本屋さん』NHK ブックス、1977年、長友千代治『近世貸本屋の研究』東京堂出版、1982、横田冬彦『日本近世書文化史の研究』岩波書店、2018年など。
- 4 『堺市史』に採録された「手鑑」は、町方に伝来したモノとされているが、近年、堺奉行が所蔵した「手鑑」が発見され、項目・記載の順ともに同一であることが判明した（矢内一磨『中世・近世堺地域史料の研究』和泉書院、2017年）。記載されたデータの正確さを裏付けるものといえよう。
- 5 ノエル・ペリン『鉄炮を捨てた日本人』川勝平太訳、1984。なお澤田平「鉄炮を棄てなかった日本人」『報告書』参照。
- 6 芝辻家所蔵の鉄炮関係史料については、渋谷一成「芝辻理右衛門家と鉄炮鍛冶仲間」が報告書に収められており、107点の文書目録が添付されている。そのうち冊子は、願書留・留帳・講銀仕帳帳などわずかに9点に過ぎない。しかも1679年から1756年の間の文書が11通と少なく、井上家の空白を埋める資料にも恵まれていないことに留意する必要がある。
- 7 洞富雄『鉄炮 伝来とその影響』思文閣出版、1991年、湯次行孝『国友鉄炮の歴史』サンライズ出版、1996年など。
- 8 山下聡一「近世都市堺・中浜1丁目の空間構成と家・家持」（大阪歴史学会『ヒストリア』288、2021年）。井上家資料の一つ中浜1丁目の水帳（土地台帳）によって、鉄炮産業の盛衰が町内の家屋敷所持にどう表現されていたかを明らかにしている。
- 9 吉川潤「近世後期における井上関右衛門家の鉄炮商い」（『報告書』）。
- 10 宇田川武久『江戸の炮術 継承される武芸』東洋書房、2000年。
- 11 藪田「〔銃砲史〕のなかの堺鉄炮鍛冶井上関右衛門家について」（大阪歴史学会『ヒストリア』288、2021年）。
- 12 総合調査開始以来、現在に至るまで、井上関右衛門家資料の整理を続けている春里友季子さんの作成した年代順整理台帳による。
- 13 井上家資料の検討会として毎月、開催されている井上家勉強会の第17回（令和5年1月12日）で、堺市文化財課相馬勇介氏の報告「井上関右衛門家住宅における埋蔵文化財調査——炉及び関連遺構の事例報告を中心にして——」があったとの情報を堺市文化財から提供を受けたが、「各遺構の建造構造との関係」「遺構の時期が不明」と記されている。
- 14 宮本裕次「大坂城の鉄炮と堺鉄炮鍛冶」（『報告書』）。
- 15 銃砲史に関する研究は膨大にあり、火縄銃の伝来、合戦での効果、技術開発、新式銃の種類、他分野への転用、大筒開発、砲術家との関係など多くの分野に広がっているが、修理に関してどれほどの関心が向けられていたのだろうか。専門家の教示を得たい。
- 16 堺の地子銀1000枚（銀43貫目）は、寛永11年（1634）の將軍家光上洛時に大坂・奈良とともに赦免された（京都は秀吉により赦免）が、それは消滅せず、石銀と呼ばれ、市民の負担賦課基準として残った。地子銀43貫目は南組・北組に分けられ、さらに本郷（本町）・付町・中浜・山口・浜通などに分割されたが、その銀額を役家数で割ると町家一軒当たりの地子額が決まる。元禄8年の場合、北組は最高が湯屋町23匁06、ついで錦之町15匁91と本郷が高く、付町の湯屋山口町が9匁06、中浜筋の湯屋町中浜7匁36、錦之町中浜2匁46と低下し、湯屋町浜4匁57となっている。詳しくは朝尾直弘「元禄二年大絵図を読む」『都市と近世社会を考える』朝日新聞社、1995による。
- 17 芝辻理右衛門・榎並屋勘左衛門・芝辻長左衛門（理右衛門分家）は鉄炮年寄を任じられるとともに、

揃って大道筋に面して広大な屋敷を得たが、理右衛門家はさらに堺政所を務めた成瀬正成を介して、尾張藩出入りの鉄砲御用を受け、柳之町浜に所在する成瀬家の拝領屋敷の管理者をも勤めていた（松田憲治「泉州堺柳之町浜屋敷と鉄砲鍛冶年寄芝辻理右衛門家」公益財団犬山城白帝文庫『研究紀要』13、2019）。鉄砲鍛冶は、鉄砲鍛冶仲間の一員と同時に、個別に大名家と出入関係を持ち、扶持を得るという二重の関係を形成していた。

18 斎藤努『金属が語る日本史 銭貨・日本刀・鉄砲』吉川弘文館、2012年。

19 井上家が一時期、庖丁打物を生業としていたことは、明治13年の庖丁打物問屋営業免許鑑札が残されていることで証明される。また『大阪府史跡名勝天然記念物』第5冊（1931年）では「井上関右衛門の如く、鉄砲、包丁の両鍛冶を兼ねるものあり」と紹介されている。

なお堺の利器・刃物については、「泉州堺打刃物庖丁業界大繁栄之図」『明治初年和泉豪商名家図譜』『堺利器同業組合創立30周年記念誌』の閲覧など、所蔵先の堺市中央図書館の協力を得た。記して謝意を表したい。

（注記）本研究は、2022年度関西大学なにわ大阪研究センター基幹研究班において、研究テーマ「鉄砲鍛冶屋敷井上関右衛門家に関する堺市との共同調査に基づく鉄砲ならびに「モノ作り」に関する研究」として研究費を受け、その成果を公表するものである。

また、本稿は令和4年10月23日に開催された堺鉄砲鍛冶屋敷ミュージアムシンポジウム「よみがえる鉄砲鍛冶屋敷——鍛冶技術の変遷を辿る——」において講演した内容を、あらたに書き起こしたものである。あらためて資料所蔵者である井上俊二氏に深甚なる謝意を表したい。

（やぶた ゆたか 関西大学名誉教授）